生きる

黒澤明　東宝　１９５２年

堀川慶治　スタッフ

人生において最も重大な節目は、就職と結婚だと思う。７０年代初め頃、大学３年の正月明けに受けた某大手自動車会社に内定。春休みに帰省したら、父が医者に「まあ５～７年の命」と宣告された。母から市役所の願書を示され、「気休めに受けて」と頼まれ、見学がてら願書を届けに行った（旧庁舎）。夏休み帰省のついでに受験。そして内定。母の就職希望への態度の変化に戸惑い、真剣に悩んでいた頃『生きる』を観た。

ロッカーの上に書類が山積みの庁舎。市の旧庁舎とそっくりで驚いた。市民の願い＝公園を実現して死を迎えた主人公。感動した。田舎の役場だって捨てたもんじゃない。

給料が３分の２（今は随分改善）しかない市役所への就職を決めた。当時は社内結婚が一般的で、結婚相手も自動的に同僚ということになった。あの時この映画に出会ったお陰で今の人生があると考えると感無量である。

ウエスト・サイド物語

ロバート・ワイズ、ジェローム・ロビンズ　米国　１９６１年

森　次男　スタッフ

ミュージカルの良さがあまりわからずに唐突に挿入される歌に「？」特に足を高くあげたジョージ・チャキリスの独特のポーズに釘付けになった。歌って踊るだけの映画ではなく『ロミオ＆ジュリエット』のようなドラマチックな展開が脳裏に焼き付いた。

演じる面白さを知った私は１９歳の時に、社会人演劇の門を叩いた。数年後に一緒に活動していた後輩たちがミュージカルに特化したいと退団し『エントツ座』というミュージカル劇団を立上げた。

後輩たちもこの映画の影響を受けていたのだ。歌って踊れない私は、もっぱら制作面のサポートをして、彼等の台本読みから公演までを付き合った。その縁で、１３年前に『ロスタイム』というオリジナル市民ミュージカルのエキストラに最高齢で参加した。演じる面でいうと、今のマジック活動も少なからずとも影響している。